

東工大、創薬支援VB

ペプチド・核酸を応用

東京工業大学の研究者らが共同でペプチド（たんぱく質の短い断片）や核酸を応用した医薬品開発に協力する創薬支援ベンチャーのファスタイド（川崎市川崎区、藤家新一郎社長）を設立した。ペプチドや核酸といった中分子を、医薬品として活用する際の課題を解決する方策を大学の知見を生かして提案する。国内外の製薬企業やバイオベンチャーの医薬品開発に協力し、画期的な医薬品の創出に貢献したい意向だ。

ファスタイドの資本金は500万円。東工大の研究者や関係者らが出資して1日に設立した。東工大と川崎市、川崎市産業振興財団が文部科学省の事業「地域イノベーション・エコシステム形成プログラム」で進めてきた活動「IT創薬技術と化学合成技術の融合による革新的な中分子創薬フローの事業化」の成果として新会社を設けた。

ペプチド医薬では東工大の秋山泰教授らの研究グループが、人工知能（AI）の技術などをを用いて開発した体内動態予測システムを活用。拡散医薬では同じく東工大の清尾康志教授らが開発した核酸化合物の合成法を生かす。ペプチド医薬の弱みとされる細胞膜透過性の低さ、核酸医薬で懸念される毒性の発現や活性の低さといった課題への対策を提案し、新薬設計の最適化に貢献する。

従来の低分子薬では治療が難しかった疾患に適用できる革新的な新薬の実用化を狙う。